

男は 痛い !

國友万裕

第5回

僕達急行
A列車で行こう

1. さようなら、おじさん型男性学

実は、僕は2年ほど前にある男性解放を訴える社会運動家の男性と喧嘩している。

その人のことはかれこれ14年前から知っていたのだが、付き合いが本格化したのは5年ほど前からだったと思う。その男性が中心となる団体で、ミニコミをつくることになって、筆が速いことでは定評のある僕に白羽の矢が立った。その男性のほうから、「一緒にやってくれないか」と声をかけられたのだ。ミニコミは季刊だったのだが、ミニコミの原稿の他にも、その男性が主催するイベントの手伝いをしたり、参加したりして、一時期は上手くいっているようにも見えていた。その男性は、男性運動の世界では結構名前が知れていて、経験や知識もあるし、話術や文章力も達人だ。その男性の訴えることには、それなりに深いところがあったし、説得力もあった。

しかし、その男性との関係はしだいに翳っていき、憎しみの残るような別れとなってしまった。

(1) 女の下ネタ

おそらく、その導火線となったのは、2年前の新年会の時のことだったと思う。その男性の手料理を僕も含めて5人(男3人・女2人)でつつきながら会食したのだが、その席で女性の一人が露骨な下ネタを始めたのだった。下ネタが大嫌いな僕は、隣の席から何度も彼女に「やめてくれ」という態度を示したのだが、彼女は僕の気持ちなどおかまいなしにHな話を続けていく。僕が怒ると、その男性は「そんなふう言うな！ 私は下ネタが好きなんだから」と僕のほうを制して、彼女の下ネタを煽るのだった。

それだけだったら、まだ許せる。ところが、その後ブログで、その時の僕のことをネタにして、「女性が下ネタをするのは品がないと思っていらっしやるのでしょうか」と書かれた時は、さすがに怒って、「僕は女の下ネタが嫌いだななんて言っていないですよ。男でも下ネタなんてする人は嫌いですから」と激しく抗議のメールを出した。その男性は、僕が「男が下ネタするのは許されるけど、女は許されない」という古いジェンダー規範に囚われているから、彼女の下ネタに怒ったのだ、一方で自分は女の下ネタに付き合うことができる進んだ男だと思い込んでいるのだ。その男性は、10年以上も付き合いながら、結局、僕のことを何も理解してはいなかったのだった。

2. 男・おごる人 女・食べる人???

その男性が行う講座でも、これは変?と思う出来事はたびたびあった。

とりわけ隔世の思いを抱いたのは、「男がおごる」という議論になった時だ。その時は女性と付き合うときは男がおごらなくてはならないんだという囚われをもっている若い男性がゲストで現れて、それをテーマに話が進んだのだが、「一体、いつの時代の話なの???'と首をかしげたくなるような話が飛び出してくる。「僕は、彼女はいないけど、女友達はいて、先日鎌倉で彼女に会った時、何から何まで彼女におごってもらいましたよ。彼女のほうが収入多いですから」と僕が訴えても、「それは一部の話だよ」と真剣に取り合ってはもらえない.....。

「俺は異常な世界を生きているのかなあー。俺の周りだったら、男がおごるのが当たり前

なんて言うような女、一人もいないけど...」

3. 男たちよ、女に白旗をあげよ!?

また当時、僕はその男性がやっている団体のHPに僕のブログをリンクしていた。当然、そこに入りしている人たちが主たる読者だった。

僕は当時ジェンダーの悩みをあれこれ綴っていて、若い頃、女性からトラウマを負わされ、女性と上手く付き合えないなど、女性に対するルサンチマンも綴ることがあった。するとその団体に関わっている男性から、こういうコメントが入った。「(女に)負けたくないだけなんちゃうのー。負けてもええんちゃうのー」。

この人は僕と同じ年なのだが、昔は妻君にDVしていて、当初は、夫のDVに耐えていた妻君が、フェミニスト・カウンセラーのカウンセリングを受けて、「あなたが悪いわけじゃないんだ。暴力をふるう夫のほうが悪いんだ」と諭されてから、所謂「逆転現象」がおきて、一時期は大変だったらしい。最初は自分がいられないから殴られるのだと思って、自分を責めていた妻君が、逆DVを始めたのである。で、結局、壮絶な葛藤の末、無事DVから抜け出し、妻君との間もどうにか修復できたとのことだった。

明らかにこの人は、自分自身を僕に投影してしまっていた。最初は亭主関白男だったのが、夫婦関係が壊れて、妻に暴力をふるい、激しいリベンジをされて、結局、妻に白旗をあげたことで、どうにか丸く収まったという経験をしているから、僕にも女に完全降伏す

れば上手くいくんだと進言しているのだ。

「俺は、シングルなんだよ。女性に DV もしていない。むしろ女性から傷つけられた男なんだ。あなたとは問題の次元も違っている。だから、あなたと俺を重ね合わせるのではなくて、あなたの妻君と俺とを重ねあわせて考えてくれ」とコメントを返したはずだけど、あの人が僕の言わんとすることをわかってくれたかなあー。おそらくわかっていないだろうなあー。

4 . 女の罪は男のせい! ?

さらに同じくこの団体に関わっていた女性から、次のようなコメントが来た。「女性を憎む男性たちのブログやサイトを見ていると、『女を下位のものと見做しているから、女性を許せないんだ』と感じる時があるんですが……。」という内容のものだった。「僕は子供の頃から、女の子にいじめられるような弱虫で、女性を下位の者に見做したことなんてありません。」とコメントを返した。しかし、彼女は、「でも……。」と、またしつこく突っ込みを入れてきた。

どうやらこの女性は、僕の気持ちを察するのではなく、僕のブログのなかに自分の読み取りたいことを読みこもうとしていた。おそらく、「女は男に何も悪いことはしていない、男の意識の問題なのだ」と僕に言わせたかったのだろう。女性から被害を受けたと感じるのは男性優位な意識を男が持っているからで、だから、そういう意識をもつ男が悪いのであって、女は悪くないのだと思いたいのだ。

5 . 二次被害

うーん、これでは議論が進まない。

僕は普段大学で教えているが、今の若い子は、性の問題に関してはきわめて敏感で、ちょっとしたことであっても、過剰な反応を示す子はいる。男子大学生も、下ネタをする時はある程度は場所と相手をわきまえなくてはという意識はもっている。「だって、先生、今は男同士で話をしていて、たまたま近くで女の子が聞いていただけでも、彼女がセクハラだと感じてしまったら、セクハラになっちゃうんですよ」と言われたのが10年くらい前だった。

もちろん、下ネタが好きな人同士が集まって、下ネタをするのは勝手だが、新年会の席で、隣に下ネタ嫌いの人が座っているのに、その人のことはおかまいなしにそういう話をし続けるなんて、環境型のセクハラである。またそれを煽った男性も、セクハラ教唆の罪にとわれるはずだ。

男がおごるという問題は、男のほうが入収入が多いのが当たり前の時代だったらわからなくはない。しかし、今はこの下流社会。男のほう給料が高いとは限らない。女性のほうも、そのことはわかっているだろう。それに合意のうえで付き合っておいて、お金をとることを強制してしまったら、売春と一緒に。そう思われるのは嫌なんじゃないの？ フェミニストのなかには、「男が女を養ったり、守ったりするのは女性差別だから、しないほうがいいのよ」と言う人だっているぜ! ?

僕が女性と付き合えないのは、女性になめられるタイプだからだ。僕は相手に合わせ過ぎる性分なので、付き合うのがしんどいのである。女だって、男に合わせてばかりでは身

がもたない。だからこそフェミニズムが起きたはずなわけで、男に女に対して白旗をあげさせようと先導するのは変だ。それでは男性解放ではなく、女尊男卑なのである。

世の中はまだまだ男性優位主義だというけど、現実はそのような単純なものじゃない。すべての男が社会的・経済的・肉体的・精神的・頭脳的に女性よりも勝っているとは限らない。じゃあ、女性たちに訊くけど、もし男にセクハラされたとして、その男がものすごく貧乏で、家族からも愛してもらえず、学歴もなく、ぶ男で、何の取り柄もない、かわいそうな男だったとしたら、女性は、その男のことを許せるわけ？ 多少の情状酌量はしてくれるかもしれないけど、セクハラしたこと自体は反省して欲しいと思うはず。それと同じで、万が一、僕が男尊女卑的な男で、女性を下位の者とする意識をもっていたとしても、僕が女性に傷つけられたことは事実なわけで、女性にも反省すべき部分があることも事実なのである。社会の外枠を牛耳ってきたのは男であるにしても、女性だってその枠の中で、男に影響を与えたり、色々な選択したりしてきているはずだ。だから、半分は女性の責任なのだという責任感をもってもらわなくては困るんだよなあー。

こんなわけで、せっかく男性運動に関わったのに、僕はイライラのし通しだった。河島英伍の歌に「時代遅れの男になりたい」という歌があるが、僕が男性運動で知り合った人たちは本当に時代遅れな男たちであり、そして、時代遅れな男しか知らない女性たちである。時代遅れな男を基準にして考えてしまう人ばかりだから、僕みたいに時代の先端に行く男(?)は、二次被害にあってしまう。女

性からトラウマを負わされた上に、女性から傷つけられた経験をどれだけ訴えたところで、「それは一部のことだ」「あなたが男尊女卑の意識を持っているからだ」「その原因をつくったのは男社会だ」と跳ね返してこられたのでは、議論は振り出しに戻ってしまう。僕は自分の感情を否定されて、さらにトラウマを深めることになる。

実は、僕は12年前にもまったく同じ理由で、他の男性解放運動家の男性ともめていて、もう二度と同じ失敗は繰り返すまいと思っていたのに、性懲りもなく同じ確執を繰り返してしまった。そういうアホな俺にも問題はあるけど、日本の男性解放の人って、なぜ、こんな(僕目から見れば)時代遅れな人ばかりなのか。僕はとても付き合っていられない。癒しを求めて運動に協力したのに、逆に傷つけられるというのでは何のメリットもないのである。

この頃は、N先生と親しくしているが、N先生は、僕がもめた二人の男性のこともよくご存じで、冗談半分で「第三の男にしないで」と言われている(笑)。二度あることは三度ある? いや、三度目の正直を信じたい。N先生こそ、僕とともに歩むことができる男性であると信じたいところなのだ。N先生は、僕が訴えんとすることも十分にわかっていると思う。「これまでは、おじさん型男性運動だ」とはN先生自身もおっしゃることなのである。

簡単に言ってしまうえば、今までの男性学・男性運動は、マッチョな男の人を脱マッチョさせる運動であり、僕みたいにマッチョでない男の人に手を差し伸べる運動ではない。もちろん、脱マッチョ運動も大いに結構だけど、「その理論を俺みたいなマッチョでない男に

あてはめないでくれー」と僕はずっと不満を募らせていて、それが鬱積して爆発してしまったのである。

2 『僕達急行 A列車で行こう』(2012)

『僕達急行 A列車で行こう』は、『家族ゲーム』(1983)や『それから』(1986)など、様々な傑作を生み出してきた森田芳光監督の遺作だ。森田監督は、まだ61歳の若さで亡くなったわけだが、この映画を見るとおいしい人を亡くしたと思わずにはいられない。『僕達急行』は、文句なく、僕にとって今年のベストワン映画だし、僕が時代遅れだと感じる人たちに、是非、見て欲しい。主演は松山ケンイチと瑛太。現代の日本映画を代表する若手男優2人だが、何よりも2人の友情が微笑ましくて、これからの男はこれだよ！と思わず、膝を打ってしまったのだ。

(1) 限りなくゲイに近い友情

僕は、この映画、まったくの予備知識なしで見たのだが、最初はゲイの話なのかと思った。冒頭、列車のなかの風景がスケッチされる。松山ケンイチは一緒にのっている女の子を怒らせている。一方、瑛太は外国人2人と何やら話をしている。同じ列車に居合わせた2人は初対面なのだが、この2人がニコッと微笑み合うショットの後、映画のタイトルが出るのである。松山がほほ笑み、瑛太がそれに応える。2人とも品が良くて草食系。なんとなくポーズ・ラブを彷彿とさせる開幕である。

しかし、話が進んでいくとそうではないことがわかる。2人とも大の鉄道ファンで、鉄道が2人を結びつける共通項となるのだ。男同士が共通のもので結ばれて、友情をはぐくん

でいく。そういう話はいくらでもある。しかし、この映画で面白いのは、圭(松山)と健太(瑛太)の友情の描き方だ。

ゆで卵と焼鳥

まず、2人が食事をしながら話す場面。ゆで卵の殻をむいているアップが真上から撮られる。そして画面は横側から、健太の部屋で、小さな食卓に向かい合って座って、卵と焼鳥を食べている2人をとらえる。なぜ、卵と焼鳥なのか。森田監督らしい、わけのわからない、すっとぼけた面白さである。しかし、深読みして解釈すれば、卵と鳥は親子どんぶりの関係だ。これは、この2人が親密であることを示唆する指標となる。

いちごミルク

またちょうど映画のなかほど、博多に左遷された圭の部屋に健太が遊びに来るのだが、「何か飲む？」という圭に、健太は「いちごミルク。練乳をたっぷりかけてシェイクして」と答える。圭がキッチンに行こうとすると、「うそうそ、お茶でいいよ」と健太。しかし、「傷ついた心に優しいよ」と圭は、本当にいちごミルクをもってくるのである。ここでまた小さな卓上テーブルで向かい合って、2人の会話が始まるのだが、「お見合い断られて、落ち込んだよ。いい人だったんだけどね」と健太。「女子の気持ちは女子にしかわからない。わからないことはストレスになるから考えないのが一番だよ」となだめる圭。ここで健太は、圭が出してくれたミルクを飲み干す。

今でも男2人でパフェを食べたりするのは恥ずかしいという人がいる。僕はこれがよくわからない。男でも甘党の人はいるし、僕もパフェは大好きだ。しかし、男が食べる場合は、女性同伴、あるいは少なくとも男一人で

ないと変に見られるのだそうだ。男 2 人だったら、居酒屋か焼き肉か、そういう男っぽいところでないとあかんと思っている人はまだまだ多くて、男性差別である。甘いものには恋愛の匂いがするからだろう。しかし、圭と健太をつなぐものはいちごミルク。2 人はゲイではないのだが、こう考えてくるときわめてゲイ的な友情であることがわかるだろう。

パステル色の服

服装にしてもそうだ。圭はパステル・ブルーの服で登場する。一方の健太はパステル・ピンク。パステルカラーとは中間色であり、柔らかさを示す。深読みすれば性的にも中性であること、両性具有的であることを意味する。さらにブルーは男子の色、ピンクは女子の色だ。トイレなどは、男子用が青、女子用が赤で表示される。青と赤を薄めれば、パステル・ブルーとピンクになるわけで、そう考えれば、圭が同性愛の男役であり、健太が女役であると解釈することもできなくない。

しかし、圭も健太もフェミニン系で、どちらも男っぽい男ではない。2 人の関係には男同士の関係にありがちな攻撃性が欠けているし、両者とも受容的で、女に負けたくないとか男のほうが上位でなくてはならないという気負いはまったく感じられない。2 人はいちごミルクの仲。男同士の友情は、スポーツとか戦争とか、戦いにカムフラージュして描くケースが多いのだが、この映画は、それとは、まったく対照的な男同士の関係をさりげなく、なにげなく描いてみせる。

同じポーズ。

2 人は、福岡を旅する途中で、同じく鉄道ファンの筑後雅也(ピエール瀧)と出会う。「あなたたちいつもこうやって旅しとっと。うら

やましいねー」と筑後に言われて、2 人は同じポーズで頭をかく。この一瞬のさりげない味わいも微笑ましい。反射的に同じポーズをするという事は、女性同士ではよくあることで、お互いがシンクロしていることを示唆するものだ。異性愛でいえば、ペアルックを着ているのと一緒にいる。すなわち、2 人は女性同士、もしくは恋人同士のような男同士の関係を結んでいるのだが、そのことをまったく意識している様子がない。こういう男同士の関係は、筑後が言うようにまったくもって「うらやましい」ものなのである。

優しい男

健太が列車にのって帰る場面。ホームにいるケンイチに何度も笑顔で手を振るところも挿入される。笑顔は、感情の表出であり、相手を包み込む優しさである。30 年前に流行った中島みゆきの「誘惑」という歌があって、

優しさそうな表情は女たちの流行、崩れそうな強がりや男たちの流行と歌っていくのだが、今となっては、優しいのは男・強がるのは女だ。

(2) 草食系男の恋愛

健太のお見合いの場面。見合いの相手あやめ(松平千里)は、健太の父・哲夫(笹野高史)や彼女の母・ふらの(伊東ゆかり)も同席している見合いの席で、いきなり「私、キャバレーにつとめていたんです」と語り始める。「関心ですねー」とすっかり固くなっている瑛太は答える。「過去は問わないよな。私も息子もキャバレー好きです」と哲夫。「いや、僕は……」と健太。どうやら健太は、キャバレーのような女遊びをする場所は苦手らしい。

あゆみと健太のデートの場面でも、あくま

でも積極的なのはあゆみであり、「あゆみさんは恋愛に積極的なんですか？」とおずおずと尋ねるのは健太のほうだ。「これと思った人にはね。うふふ」とあゆみ。その後、健太はまんざら彼女のことが嫌いではないのだが、あやめのほうは「インパクトがないから」と健太との付き合いを断り、一度は寄りを戻そうとするかにもみえるのだが、やはり彼女のほうから分かれるということになる。

一方、福岡に転勤した圭は、福岡の同僚から、「中津の別嬪さんには気を付けなよ」と言われて、「趣味は列車にのって音楽を聴くことです。誤解されないように最初に言っておきます」と答える。またその後、クラブに誘われる場面でも、「僕はそういうところ行ったことないんで」と後ずさりする。

圭も、健太同様に、女性に対しては奥手であり、キャバレーやクラブのような女遊びをしたりする場所には馴染めないし、行く気にはなれない。そんなところに行く暇があるんだったら、鉄道のことを考えていたほうが楽しい。そういう男性なのである。

圭がつきあっているあずさ(貫地谷しおり)は、あゆみ同様に、恋愛に対して積極的な女性で、デートでも、「私のこと好き？好きでしょ」と迫ってくるし、「大丈夫よ。自分の分は自分で払うから。私、おごられるの嫌いな」と男におごらせることを拒否する現代的な女性だ。「私のこと好きならキスして」と迫るあずさに圭が応えて、一瞬ロマンティックなムードが高まる場面もあるが、ここで列車の音が聞こえてきて、思わず、圭は唇を離してしまい、あずさを怒らせてしまう。

2人の別れの場面では、「私と結婚する気ある？」と問うあずさに、「好きだけど、結婚今

はしたくない」と答える圭に、「私は今、したいのよ。旦那さんと色々なところを旅したいの。誰もいないところでの中途半端なキス。私、忘れないわ。」と言いだし、結婚することになった外国人の男を圭に紹介する。

男のほうが優柔不断。女のほうは、さばさばしていて、人生に対して意欲的、自分に対して不要と考えた男を未練たらしく追うことはなく、きっぱりと決断を下し、そして、相手も傷つけずにカラッと離れていくのだ。

(3) 趣味がプライオリティ。

結局、圭も健太も、女性よりも鉄道のほうに夢中だ。女性だけでなく、仕事よりも鉄道である。

2人が偶然知り合った筑後は、クラブでの再会で、圭の取引先の社長であることがわかり、圭と筑後は仕事のことやクラブの女性たちのことはそっちのけで、鉄道談義に熱中する。圭の会社の接待役・天城(西岡徳馬)は、「どうやら2人はできとりますな。鉄道の話で結びついている。あの2人は2人きりになれます。そのほうが取引は上手くいくでしょう」と社長(松坂慶子)に耳打ちすることになる。圭、健太、筑後、男たちのプライオリティは趣味なのである。

終盤、あずさに振られた圭に健太がよりそう。「僕達もてないのかなあー僕も見合い断わられたし」と健太。「関係ないよ。僕らしかわからない世界があるさ」と圭。「そうだよなあ」と健太。ここで筑後が話に割り込んでくる。「そうなんだよ。僕も仲間に入れてくれんね。あんたたちがうらやましかよ。社長になると友達がいなくなるもんね」

筑後のこの台詞には社長という地位よりも、

共通の趣味をもつ友達がいる人生のほうがずっといいという想いがこめられている。

映画のファイナルは、列車にのって、一緒に駅弁を食べ、ビールを飲む仲むつまじい圭と健太のツーショットと鉄道が走っていく場面がモンタージュされる。

「休みとってどこかに行こうか」と圭。「お互い、カップル同士だったりして」と健太。「それはないよ。でも、そのほうがいい、そのほうがいい？」とふざけて、健太の顔に自分の顔を近づける圭。2人は身体の関係はないのだけでも、男同士のカップルでもいいのか、それが一番楽しいんだったら……とこの結末は訴えているように思える。

2人は女性がいなくても、仕事が上手くいかなくても、鉄道と友情がある限り、十分、幸せそうに見えるのである。

3 . 新しい男たちの時代。

この映画の優れたところは、ジェンダーとセクシュアリティをちゃかしているところだ。社長を松坂慶子が存在感たっぷりに好演していて、女性がトップの会社なのだが、そのことを映画はことさらに強調してはいない。当たり前のことのように女が社長を務め、当たり前のことのように主役の男二人が同性愛的な/女性的な友情を紡いでいく。

それが、きわめてナチュラルに描かれ、新しい性の時代の幕開けを感じるのだ。しいてジェンダーを感じるのは、鉄道が2人の共通の興味であること。列車は旅のシンボル。旅するのは男なのである。これがもっと女性的な趣味だったら、さらに面白いことになっていたところだが、東映のようなメジャーな会

社で製作された映画にそこまで期待するのは酷だろう。かつてはやくざ映画というイメージだった東映が、ここまでジェンダーフリーな内容のものを世間に発表したことを高く評価したいと思う。

もう時代はここまで来ているのだ。これからは新しい男性の時代。とはいっても、まだまだおじさんたちは、30年前の中島みゆきの歌の世界を生きている。俺は、長年、男性学・男性運動をがんばってきたつもりなんだけど、まだ男性運動の内部の人からも認めてもらえない。いや、内部の人だからこそ、新しい男が見えなくなってしまうているのかなあー。本当に俺はつらいよ。あー、男は痛い！です。